

スコール・マスターズ通信

第34号
平成21年9月29日

「首都圏生きがい講座」をスコール会館にて開催

7月18日(土)、「首都圏生きがい講座」を開催しました。今年は場所を例年の渋谷からスコール会館へ移しての開催です。当日は166名(うち男性は112名)の参加があり、2階ホールは満員の熱気に包まれました。内容はマスターズ会員の岡本一誠氏から体験発表があり、続いて、永池会長から講演をいただきました。

永池榮吉会長 講話要旨：「どう生きるか 家庭と仕事」

1. 家族の成立と父親の役割

人類の登場と家族の成立と父親の出現にはつながりがある。母親と子供に父親が加わり、共同体の中で一定の役割を果たすようになることで、家族が生まれ、家庭ができあがった。ところが、現在、その家庭にとって重要な父親の役割が忘れられ、社会の根っこである家庭がおかしくなっている。夫婦が向き合うことをせず、大人は人間としての生地を磨くことを怠り、そんな中、生活は複雑化し、家庭が崩れる条件がたくさんできているにもかかわらず、家庭のコーディネーターとしての父親がその役割を果たしていない。



心を強くするのに、一番強いのは信仰を持つことであるが、スコールでは、イデオロギーからも宗教からも束縛されない哲学運動としてのスタンスを基本にしている。ただ、理屈をどんなに学んでも心は強くならない。大事なことは理屈を覚えるのではなく、心を強く、心を広く、心を豊かにすることである。

2. 仕事の問題 問われる人間力

国際競争のまっただ中の日本にあって、ビジネスマンは過酷な環境の中で仕事をし、弱音を吐いても吐かなくても、納得のいく生き方をしていかなければならず、人間力が問われている。家庭における自分と職場における自分は別々ではない。子供は親の人間としての生地そのものを見ている。この十年、そのあたりの劣化がかなり進んでいると危機感を感じている。

4. 体験とチャレンジ

心の根の部分で人間が太くなった程度、その人の生き方は変わっていく。そのためには、哲学を磨き、自分の生き方を体験的に磨き、心の芯を自分の中に作り上げていくしかない。早起き、達磨の絵、滝行もチャレンジし体験を続けることで、できるようになってきた。平凡な人間でもチャレンジし続けることでそこそこのことはできるようになる。

3. 弱くなった日本人の心

自殺率、鬱病、家庭内暴力、離婚等のデータを見ると、日本人の心がホントに弱くなったと感じる。

5. 人生は学習なり

人間が生きるということは、そのこと自体、愛され、育てられているということである。そこには生きることへの敬虔な感動がある。自分は愛され、育てられていると自分に思い込ませることに成功した人間は強くなる。困った問題であっても、それは自分を育てる先生となる。「人生は学習なり」これはスコールの基本テーマの一つである。人間としての生地をどう磨いていくかが大切である。(白石 英樹)

「子供の良いところをほめよう」

京浜地区：岡本一誠



私は実父を早くに失い、また養父も中学時代に病死したことから、父親像を自分の中に描ききれませんでした。そのことが父親でありながら、育てられた祖母や母親のような子育てを三人の息子にしていたことに思い当たります。即ち過干渉・過保護、規範の強い育て方をしてきたように思います。家の中に母親が二人、私の母が健在で同居していた時には母親が三人いたよ

うな状態であったのです。そのことが子供たちに大きな影響を与えたと考えます。

永池会長の著書「こころの添木」に「子どもは親のプラス面よりマイナス面を、より強く自分のうえに表現します。子供が勉強しない、意欲がない、言うことを聞かない、あるいはいじめられる、学校を休む。ただそれを一方的に責めたり、ムチ打ったり、ハッパをかけるだけでは、決して問題解決にはつながりません。子供は親の生き方の問題点を、トラブルの形で教えている存在です。子供を責めたり、正そうとするだけでは、かえって問題をこじらせてしまうことになりかねません。(次頁へ)

子どもを通じて自分の生活を省みるという姿勢が、実は大切なのです」とあります。

子供は親が、特に父親があれやこれやを言わなくとも子供は自然に親の価値判断や、求めていることを敏感に感じ取っているのです。子どもが親の望むレベルになかなかついていけないと感じた時に、その上、父親があれこれうるさい存在であったら、子供は「ついていけない」と素直に父親には言いません。子供は、日頃自分のモデルでもある父親の求めるレベルについていけない自分を情けなく思い、その場から逃げ出してしまうのです。不登校の場合、「何で行かないんだ」、「行きなさい」と言ってみたと、子供はさらに追い込まれた気持ちになるでしょう。特に最近、家・学校・稽古事・塾を歩き来し、子供にも発散出来る場所が少ないのです。このような環境の中では、むしろ父親は子供の良いところを見つけてほめてやることこそが、子供がのび

のびと前向きに成長してゆく糧になるのです。例えば、成績表を持って帰った時、まずは努力をほめてやらねばなりません。私はすぐに点数の低い所を見つけて、「どうしてだ」と聞いたものです。息子の一人は、「これは前より良くなったんだ。それをほめてよ」とまで抗義をしてきたこともあります。

現在30歳を超えた息子でも褒めるとニヤツとするのは、レジメに息子の良い点をリストアップしたものをつけておきました。三人分ですから66項目ありますが以外に多いものです。しかしこれだけ多い「良いところ」の項目のいくつを私は子供たちに口に出して表現していたかと反省するのです。

振り返ってみれば、先生に褒められたことや親に褒められたことが、現在私の得意になっているものがたくさんあります。いつになっても遅くはないのです、子供の良いところに気付きそれを表現して行くことが父親の役割だと思えます。

新旧代表幹事からのご挨拶

6月の総会にて代表幹事が三橋氏から小俣氏へ引き継がれました

就任にあたって 小俣 富雄



6月のマスターズ総会において、代表幹事に就任いたしました。初代の村下三郎氏、二代目の三橋克興氏に続く3代目です。若輩者ではありますが、スコール会員年数面で見れば、ベテランに属する方です。どうぞよろしくお願いいたします。

どうぞよろしくお願いいたします。

2002年(平成14年)10月に発足した「スコール・マスターズ」は、スコール協会が推進する生涯教育の場を通して、夫として、父親として、そして社会人として“生き方の原理原則”を学ぶ男性の会です。現在、会員は400名を超え多彩な活動を展開しています。これは歴代の代表幹事および幹事の皆さんの尽力とメンバーの献身的な行動の賜物であります。私は設立当初から参加していますので、その発展振りは目を見張るものがあると実感しております。

まず、研修面では「人生学コース」と「心身開発トレーニングコース」の二本立て研修の内容充実と、「生きがい講座」の男性参加率アップ、が顕著です。また、研究成果として「危機管理事例集」を3冊発行、自分史を中心とした「自己開発システム」(仮称)の研究、など着々とその成果がアウトプットされています。そして、これらの活動状況をお知らせするため、「メールニュース」や「ブログ」の開設、さらに「マスターズ通信」を発行し、会員間のスムーズな意思疎通を図っています。

親組織であるスコール協会は来年30周年を迎えます。

一方、マスターズは僅か7年と短いものの、これらの活動を通じ、男性の会としてかなり存在感が出てきたと自負しています。

会員の“心と身体の活性化”を支える「スコール・マスターズ」の発展を、皆様の先頭に立って走る所存です。今後とも一緒に学び且つ遊びたいと考えます。

退任にあたって 三橋 克興



ミドル・メンバーズからマスターズへ9年間、永池会長ご指導のもと『人生哲学』を学び、こころの財産を蓄積することが出来、心から感謝を致しております。

2年前体調に異変を感じ、「脳動脈瘤」の手術をしアフターケアーに務めてまいりましたが、今後の体調も考慮し、自ら代表幹事を退任する事を決意し、道半ばにして申し訳なく思っております。

マスターズの基本的スタンスである『自己実現と危機管理』を学び、ここに幹部の方々の叡智の結集である『危機管理事例集』が目に見える形となって全編が発刊された事は、大変心強く思っております。

人間の一生は波瀾万丈であり、苦難に負けず堪え忍び、今年『喜寿』を迎える事が出来、先般マスターズの関係の方々から、心暖まる祝福のお祝いをして頂き、感無量であり衷心よりお礼を申し上げます。来るスコール協会の30周年に向かって、小俣新代表幹事を中心として、マスターズが益々飛躍発展をされますよう期待しております。今後とも宜しく願い申し上げます。

自分を作った少年時代の父母の教え

北海道地区 中澤利治



私は昭和12年4月16日苫小牧市で生まれ、父親は酪農(農業)家でありました。身体は小柄ですが逞しく、地区の会長(現在の町内会長)をしておりました。母親は無学(当時の小学校卒)ですが、お人よしで近所の人

の話を聞いて、ともに泣いていることもありました。母は身体が大変強く、子育て・畑仕事さらに父方の祖母の面倒までをよく見ていました。また、当時は貧乏ではありましたが、地区の人が食料品(米や味噌等)を借りに来ると、母は少しずつでも分けてあげていたようです。

そのような両親のもとに私は九人兄弟の四男として生まれましたが、明るい家庭で、家族は全員が健康で育ったことに感謝しています。思い出の一つに私が4歳の頃だったと思いますが、自宅から3キロほど離れた所にSさんの家があり、そのお宅の長男の方が自宅で結婚式を挙げることになりました。私の父母が仲人でしたので、結婚式の男(お)ちょろ役を私が、Kさん宅の娘さんが女(め)ちょろ役をすることになりました。

【注：男(お)ちょろ役・女(め)ちょろ役＝三々九度の杯の儀式の仲立ち役をする男女の子供】

事前にリハーサルも重ね、無事に結婚の儀式も終わり、帰宅は夜もかなり遅くなっていったと思われま。私は緊張したのかいつの間にかそこでうたた寝をしてしまいました。目を覚ますと父の背中の中の温もりが心地よく、月夜の道を揺られての帰り道、父の背中を逞しく感じたことが今でも心に残っています。

当時は、乳牛を15～16頭、農耕馬2頭、羊、鶏等を育てていましたが、畑耕作が主でありました。長男・次男ともに成人を期に家を出て、夫々の仕事についていましたので、家の手伝いは三男の兄と私が主に行いました。春の仕事は兄に学校を休んでやってもらうことも多く、私なりに申し訳なく感じていましたので、私に出来る仕事はなるべくするようにしていました。

私は牛を放牧する作業を分担していました。午前10時ごろに牛を3キロほど離れた放牧地に連れて行くため細い道を一列に歩かせます。途中にある国鉄(現JR)の踏切を安全に牛を渡らせるのが子供の私には大変なことでした。道が狭いので、先頭の牛が踏切に近づいた頃合いを見計らったうえで、牛の後ろにいる私は道に並行している林の中を全速力で走って先頭の牛の前に出て、安全を確認して踏切を渡らせるのです。放牧地で、ある程

度草を食べると牛は昼寝をします。昼寝のあと、もう少し草を食べさせて帰路に着きます。牛全体の健康状態への目配りと、行き帰りに渡る国鉄の踏切での汽車の往來の確認が大事な仕事です。帰りは午後3時ごろに牛舎に着き、夫々の場所に牛をロープでつなぎ終了します。そのほかに寝藁切り、清掃等の雑用がさらに続きます。このような仕事が毎日続きますが、早朝一回夕方一回の乳搾りだけは父母の担当でした。

日々、夫々の牛の健康状態を観察したり、天候を見たり、他の家畜の動きを察知することによって、自分の行動を決める心得を幼少より父から学んだことが今日に至るまで役立っていると思います。会長の著書『生き方の基本』の「危機管理に強くなる」の章にありますように「様々な苦勞や努力が、やがて自分を作っていく」という言葉が素直に納得できるのです。

今、考えて見ますと小学校へ行く前は、一枚きりの服で遊び、父から指示される仕事にも同じものを着用、毎日毎日同じものを着ていたように思います。よくひざの部分に穴が開くと、母が見つけ、子供たちが寝ているときに夜なべをして、つぎを当て直し、翌朝起きると夫々の枕元にたたんで置いてありました。その頃、自分たちは寝ているのに母はいつもそのように働いて身体は大丈夫なのかと思い、また感謝もしていたものです。

当時は家族全員が繕った服を着るのが当たり前で、新しい下着も年に一回、新年を迎えるときに父が全員に渡していたことが、いまや良い思い出としてあります。私が夢にまで見ていた小学校入学。入学前に父は町へ私の制服とカバンなどを買いに行き準備をしてくれました。その制服とカバンを身に着けたときの服のにおいと素晴らしい色(しもふり)にふれたときの嬉しさが今でも

鮮明に心に残っています。

自宅より4キロでT町、さらに2キロで東地区、合計6キロで東地区の坂の上に小学校着きます。自分の足で1時間30分くらいの時間がかかり、帰宅にも同じ時間がかかります。自宅に着くと腹ペコの状態ですが、母はまだ牛舎で仕事をしていません。全員が揃ってから夕食になりますが、その時間が一番の楽しみでした。父・母からの話し、さらに自分たちからの話しが続き、大変にぎやかな時間を過ごして一日が終わります。とにかく、朝は早起き、仕事をしてから朝食、急いで学校へ、これが毎日でした。

学校での運動会が我家においても一大行事でした。特に早朝から全員が協力して、家畜に朝食に昼食も含めて与え、馬車で家族全員が学校に出かけました。会場に着くのを今か今かと馬車で出かけるのですが昼近くになり会場に着きます。私は家の手伝いで鍛えた体、足で運動会では上位入賞することもあり、このことについても両親に「お陰さまで」と感謝するのです。(完)

人生学講座

下期本部研修

下半期のマスターズ研修は淵野辺のスコール会館の研修室で開催されます。下掲の日程・要領で「心身開発トレーニングコース」と「人生学コース」の月2回の開催となります。

心身開発トレーニングコース	人生学コース
10月4日(日)	10月18日(日)
11月8日(日)	11月15日(日)
12月12日(土) 合同研修・懇親会(14時開始)	
1月10日(日)	1月24日(日)
2月7日(日)	2月21日(日)
3月7日(日)	3月14日(日)

受講料は「心身開発トレーニングコース」「人生学コース」それぞれ5,000円(下半期)ですが、「心身開発トレーニングコース」と「人生学コース」のダブル受講は7,000円(上半期)となります。体験参加も無料で受け入れていますので是非ご参加下さい。



心身開発トレーニングコース (10:00 ~ 12:30)
 <リラクゼーション禅> 小川本部長
 <ボイストレーニング> 小川本部長
 藤田・柴原各委員(トレーナー)
 <ボイストレーニング(朗読練習)> 北澤委員
 トレーニング後、昼食懇談会(500円)を開催します。

人生学コース (10:00 ~ 12:00)
 第一部【60分】
 <実践体験の事例発表> 講師養成講座メンバー
 第二部【50分】
 <会長講話&質疑応答> 永池会長・小川本部長

当面の行事予定

- 10月4日 心身開発コース (スコール会館)
- 10月18日 人生学コース (スコール会館)
- 11月8日 心身開発コース (スコール会館)
- 11月15日 人生学コース (スコール会館)
- 11月20日 第9回川上杯ゴルフ会
(場所・仙石ゴルフコース)
- 11月下旬 マスターズ通信第35号発行
(広報委員会)
- 12月12日 心身&人生学合同研修
(スコール会館)

青 朱 白 玄
春 夏 秋 冬

春先、新型インフルエンザがわが国にも侵入、発症した人がでて来たが、たまたまあまり拡大せず、影響も大きくならず小康状態となった。そうすると、あの深夜の厚生労働大臣の記者会見や空港での検査を「大騒ぎ」という表現を使ってあの喧騒は一体何であったのであろうかという論調が一般化した。

しかし、正体がよくわからない病原体により発症した疾病、特に空気感染による感染症について警戒心を強めることは当然のことと思われる。一部のメディア、関係者などは警戒したことすら過敏な反応とした。確かに問題点を指摘することは大事なことはあるが、問題点だけが浮き彫りとなり、疾病本体に対する正確な認識を得ようとする意識が阻害されてしまう。

さらに、日本人は喉元過ぎればなんとかで、何事も無ければ警戒心をゼロにし、危機管理が疎かになる傾向がある。8月、静岡を中心に大きな地震が発生したことは記憶に新しい。この折、不幸にも死傷者がでるとともに家屋、インフラ等に少なからず被害が発生したが、住民の防災に対する意識が高かったことが大きな要因となって被害を最小限に止める事が出来たと聞いている。日頃からの備えが功を奏した結果といえる。

新型インフルエンザの影響が顕在化してきている昨今、有事といっても良いような様相を示しており、予防や治療等十分な備えが必要となっている。精神論だけで乗り越えるには限界があるような気がする。(梶田 健二)

編集後記 私は亡くなった父の仕事を継いでいる関係で、今も父の代からのお客様とお付き合いがあります。以下はそのお客様の一人から最近聞いた話です。その方はある時、生前の父に後継である私について「私は今後、あなたの息子さんを信頼していてもいいでしょうか？」と聞いたことがあったそうです。これに対して父は「彼は私の息子ですから、彼のことを私だと思って、信頼していただいて大丈夫です」と自信を持って答えたと言います。「お父様はあなたのことを信じていましたよ」と言われ、初めて聞いた話でしたが、とても勇気づけられました。親からの無条件の信頼が子供にとってどういう意味を持つのか、改めて実感した次第。40才を過ぎて、亡父からもらったエールですが、それは父親となった息子へのエールのようにも感じます。父親の役割を考えさせられます。(白石 英樹)

編集：社団法人 スコール家庭教育振興協会
 スコール・マスターズ 広報委員会
 発行人：小俣富雄
 〒194-0013 東京都町田市原町田4-7-12
 TEL : 042-707-4500
<http://www.schole-masters.org>